

モンゴル移行経済25年の光と陰



日本車が多く走るウランバートルの大通り

ソ連に次ぐ2番目の社会主義計画経済国として誕生したモンゴルが、約70年の歴史に終止符を打ち、資本主義市場経済国に転換したのが1991年。以来四半世紀のマイルストーンを通過した。政治的な混乱を伴わない体制転換だったが、移行期の政治は試行錯誤の連続。市場経済が効果を上げる一方で、停滞している部分もあり、いまだ移行経済ただ中の様相を見せている。

昨秋、日本労働ペンクラブの訪問チームに参加して首都ウランバートルを訪れ、四半世紀の落差と今も変わらぬ“草原の国”の実情を垣間見た。本年は日本モンゴル国交回復45周年。不透明な国際情勢の年でもあり、昨年スタートしたエルデネバト新政権の新たな国づくりが注目される。

車で大渋滞の首都中心部

空路、到着間近を知らせる機内アナウンスで窓の下を見ると、黒々とうねる川を挟んできらびやかな夜景が広がっていた。こんなに明るかったっけ。四半世紀でずいぶんと変貌したのかなとの思いがよぎった。

労働ジャーナリスト

横館久宣

25年前、筆者が初めて訪れた厳冬のウランバートル。市内全体はうっすらと雪に覆われ、昼も夜も静まり返っていた。それが今では中心部が車による大渋滞に様変わりしていた。

車の多くはトヨタ車をはじめとする日産、ホンダ、スバルなど日本の乗用車。中古のプリウスが今、大人気という。訪問したトヨタの現地ディーラーの広い倉庫にはざっと見て80台のピカピカの大型ランドクルーザーが並んでいた。1台900万円から1700万円ぐらい。現物を見に来た客が購入後その車に乗って帰る。

市の中心部では20階以上の高層ビルが目立つ。路上の女性の服装がおしゃれになり、立ち居振る舞いが自信に満ちていた。ビルの地下の食品・雑貨マーケットでは多彩な商品が山積みされ、多くの客で混雑している。野菜や果物の豊富さに四半世紀前との落差を感じた。外資系シティ・ホテルのロビーやレストランのにぎわいは東京都心の有名ホテルと同様だった。

経済成長の減速と失業増

市場経済のもと繁栄の様相を見せる一方、最近の経済失速に伴う失業増や、貧困層の増大が陰の部分として重い課題になっている。

モンゴルの経済は2010年から14年の5年間で12.2%という高い成長を実現したが、15年に